



1980年代のPC市場は革命的でとてもエキサイティングだった

【東京・内神田発】今回ご登場いただいたハワード・デイヴィスさんは、とても穏やかで知的な、まさに「英国紳士」そのものだった。そのデイヴィスさんが兄のジェレミー・デイヴィスさんと二人でIT市場の調査会社をロンドンで立ち上げたのは1983年7月のことだ。私たちBCNの創業は81年8月だから、PC市場の勃興とともにほぼ同時期に同じようなスタイルの会社を起こしたことになる。デイヴィスさん自身の生き方とともに、その創業経営者・組織のリーダーとしての考え方に興味がつついった。

(本紙主幹・奥田芳恵)

コンピューターの普及とともに市場調査会社を立ち上げる

奥田 デイヴィスさんは、ロンドンに本拠を置く、IT市場の調査会社CONTEXTの創業者ですが、まず、起業に至るまでのいきさつを教えてください。

デイヴィス ビジネススクールを出たものの、仕

事のオファーがなかったからです(笑)。ビジネススクールに行く前は、フリーランスのコンサルタントとしてさまざまな業界のマーケットリサーチに携わっていました。

奥田 それはどんなリサーチですか。

デイヴィス その内容は本当にさまざまです。例えば、米国政府のために世界のゴム市場の調査をしたこともあれば、化学会社の依頼でスペインに行き、スイミングプールの水の容積を調査したこ

ともありました。

奥田 そうした仕事を経験された後に、ビジネススクールでMBAを取得されたのですね。

デイヴィス 83年、英国に初めてPCが登場し、そこからヨーロッパ全体に市場が広がっていきました。そこで、私は1歳上の兄、ジェレミーと一緒に、PC市場の動きを追いかけるようになったのです。それがCONTEXTの始まりで、同年7月に、それまでラテンアメリカで教師をしていた兄とともに会社



PROFILE 1951年、英国生まれ。スコットランドのセント・アンドリュース大学を卒業後、75年、エコノミスト・インテリジェンス・ユニット（EIU）に入社。工作機械産業の分析からグローバルなゴム市場の分析まで、コンサルタントとしてさまざまなプロジェクトに携わる。EIUを退社後、ロンドンビジネススクールでMBAを取得。83年、兄とともに市場調査会社CONTEXTを創業し、同社CEOを務める。

構成／小林茂樹
text by Shigeki Kobayashi

撮影／馬場磨貴
photo by Maki Umaba
2025.5.19／東京都千代田区のBCNにて

を設立しました。

奥田 それは何歳のときのことですか。

デイヴィス 32歳です。私は誰かに雇われたいとは思っておらず、また私のことを雇いたいと思う会社もあまりなかったようなので（笑）、生計を立てるために起業したわけです。

奥田 もともと経営者になろうという志を持っていたのですか。

デイヴィス いいえ、そういう志があったわけではなく、結果的にこういうかたちになっていったということです。

奥田 当時、PC市場の盛り上がりをどのように感じられていましたか。

デイヴィス 新しく、革命的で、とてもエキサイティングでした。そして、PC市場に関わる人は面白い人が多かったですね。平凡ではなく、変わり者がたくさんいました。ちょっとエキセントリックだったり、他の人と異なる考え方をしたり、未知の世界に関わることに強い興味を持つタイプですね。

奥田 ワクワクするような新しい世界だったのですね。

デイヴィス 当時のPC業界は急速に拡大しつつあったのですが、その拡大とともに、マーケティングディレクターやセールスディレクターなど、マネージャークラスの人材が広く求められるようになりました。

新しい業界ですから前職もいろいろで、私が覚えているのは、醸造所でビールのマーケティングディレクターをしていた人がPCのマーケティングディレクターになったり、IBMのマシンに似たPCクローンをつくっている企業の経営者は、かつてハリウッドのB級映画に出ていた俳優でした。

奥田 まさに、多様な人材が集っていたのですね。

デイヴィス そうですね。面白い人が集まり、新しいことをやろうという気概に満ちた時代でした。

自分の生き方を培った スコットランドの大学時代

奥田 デイヴィスさんも、そういうちょっと変わった人の一人だったのですか。

デイヴィス それは自分では分かりません。両親や友達に聞いてみないと（笑）。ただ、自分のキャリアを開拓することに興味はなく、問題を解決することや人々が大事にされる環境をつくりたいと思っているところが、普通の人と異なるかもしれません。

奥田 そうした思いは、ビジネスをやっていく中で培われたものなのでしょうか。

デイヴィス いいえ、その前からそういう思いを抱いていました。

私は、スコットランドのセント・アンドリュース大学で黄金時代のスペイン文学を専攻したのですが、そこには素晴らしい先生がいて、自分がどのような生き方をすべきか、ということに関して大きな影響を受けました。

奥田 デイヴィスさんに影響を与えたのは、どんな先生でしたか。

デイヴィス 私の恩師であるフェルディ・ウッドワード教授は、いつも私たち学生に、正直であることと、疑問に思うことをどんどん質問するよう求めました。そして彼は学部の運営を任される立場にありましたが、非常に人を大事にしながら物事を進めていました。私にとってこの大学は、とても居心地がよかったですね。

奥田 大学では、なぜスペイン文学を専攻したのですか。

デイヴィス 私が幼い頃、父が石油の仕事でベネズエラに赴任したため、8歳くらいまではスペイン語も学んでおり、それでスペイン文学に興味を持ったのです。また、大学では哲学や美術史も学びました。大学入学後、奨学金を得て1年間、スペイン・アンダルシア地方の中心都市セビリアに留学し、その後、スコットランドの大学に戻りました。

奥田 学生時代、将来何になりたいと思っていましたか。

デイヴィス 卒業する頃、大都市には住みたくない、自分にとって心地よい街に暮らして生計を立てたいと思っていました。それで会計士を目指し、ケンブリッジで会計学を学ぼうと考えていたのですが、ロンドンのエコノミスト・インテリジェンス・ユニット（EIU）から面接を受けないかという誘いが来たのです。

奥田 それが、いろいろなマーケットリサーチをされた最初の会社ですね。

デイヴィス そうです。ロンドンのEIUのオフィスは、バッキンガム宮殿に隣接した「グリーンパーク」と呼ばれるとても美しい公園を見渡せる場所にありました。そして同時にケンブリッジの会計事務所からも仕事のオファーがありました。だから、マーケットリサーチの仕事を1年間やってみて、それが好きでなかったら会計の仕事に戻ればよかったのですが、それがとても楽しかったのです。

奥田 マーケットリサーチの仕事はどうでしたか。

デイヴィス ヨーロッパ中を旅して調査する仕事は面白いものでした。インターネットやEメールのない時代ですから、電話でアポを取って人に会い、インタビューをして、調べ物は図書館でするわけですが、それがとても楽しかったですね。

奥田 そのお仕事が、現在のCONTEXTにつながっていくのですね。

最愛のお孫さんと



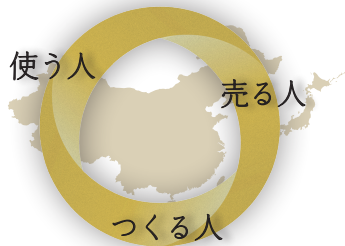
お孫さんを膝に乗せ、仲良く本を読むデイヴィスさん。読んでいるのは『1000THINGS IN NATURE』という自然図鑑。学究肌のデイヴィスさんらしく、小さな頃から知的好奇心を刺激するような本のセレクトだ。

デイヴィス そうですね。でもEIUを辞めた27歳のとき、修練者としてベネディクト修道会の修道院に入り、修道士になりました。

奥田 修道士、ですか……。

デイヴィス はい。修道院で過ごした数カ月間は、素晴らしいものでした。でも、修道士は自分の天職ではないと思い、MBA取得のため、最初に少し触れたロンドンビジネススクールに2年間通うことにしたのです。（つづく）

BCNは「ものづくりの環」を支え
育むメディア企業です



——「ものづくりの環」の詩——

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意（おもい）が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人——
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN

<http://www.bcn.co.jp/>

※この記事は、BCN+Rの「千人回峰（対談連載）」で公開中です。
<https://www.bcnretail.com/hitoarite/>